かささぎ 通信 第56号

2017年5月12日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　　「森三郎の作品を読む会」

二〇一七年四月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和11年8月号初出作品「狐の提灯」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）、「夕顔物語」（『森三郎童話選集　かささぎ物語』所収）を読みました。

「狐の提灯（童話）」（茅原順三）は、狐に化かされた太郎兵衛という紺屋の話です。染粉を仕入れに行った太郎兵衛は、村に帰る時、狐が村の庄屋の末娘に化ける場面を目撃し、化かされないようにこちらから裏をかいてだましてやろうとします。「おじさん、いっしょに行きましょう」という娘の手をぐっとつかむのですが、狐に逃げられて、手には縄の切れ端が残っていたというのです。途中迎えに来てくれたおかみさんに染粉を渡し、提灯を受け取って家に帰りますが、家ではおかみさんが石臼をまわしており、提灯を持っていたはずの太郎兵衛の手には、丸太棒が握られていたのです。翌朝、昨夜の染粉は裏の田んぼにぶちまけてありました。

いたずら狐との知恵比べの類話はよくあります。昭和6年1月初版発行の佐々木喜善『聴耳草紙（ききみみぞうし）』にも、狐などに騙されないと、いつも自慢している爺様が、狐に騙されるふりをしていたつもりが、やっぱり狐に騙されてしまう話が載っています。

「狐の提灯」の中で、狐は娘に化けて「ほうたる来い。山吹来い。」とホタルを追う歌を歌います。この歌は昭和8年11月号『赤い鳥』の「ほたる」の中でも出てきました。（「かささぎ通信」第37号参照）また、動物が人間に化ける時の仕草は、昭和7年8月号『赤い鳥』の「いたちの手ぬぐひ」にも出てきました。「狐の提灯」を子どもたちに語った会員によれば、子どもたちは、「狐が化けるところを見られてうらやましい」と言っていたそうです。

「夕顔物語（童話）」（辻　乙四郎）は難題話と言ったらよい話です。ある広い湖のほとりに住む青年が、黄金色の羽を持つ白鳥を捕獲します。その黄金色の羽を青年に取られた白鳥は自分の家に帰ることができず、青年の妻になりました。青年の妻の美しさをねたんだ村長の妻は、彼らを村から追い出すよう夫の村長に頼みます。村長は彼らに難題を課し、それができないなら村から出るよう迫ります。姉の白鳥は、妹の白鳥が黄金色の羽を見つけて家に戻れるように願いながら、難題の解決に協力してくれます。難題は三回出されました。一回目は、雲の上に舞っているという黄金色の鳩を射落とすこと、二回目は常夜の国（ママ）にいるという長鳴鳥を連れてくること、三回目は大火田山の頂に住んでいる火食鳥を取ってくることでした。姉の白鳥は、火食鳥の毒の爪に胸を刺されて倒れた青年を救いますが、青年から、妹の白鳥の黄金色の羽を取りかえし、二羽の白鳥は空の自分達の家に戻って行きます。青年との間に生まれた子どもは、湖の岸辺に咲く夕顔の花になりました。

「長鳴鳥」は古事記の天照大神の話からのものでしょう。また日本に「火食鳥」が入ってきたのは江戸時代初期寛永年間（国立国会図書館の電子展示会「描かれた動物・植物　江戸時代の博物誌」参照）と言いますから、この難題はいろいろな情報を元に作られていることが分かります。「かささぎ通信」第55号でも触れましたが、兄・森銑三の影響もあるのでしょうが、森三郎の読書の幅の広さを感じます。

さて『赤い鳥』昭和11年8月号には「先生のご入院から告別式まで」というページがあり、六月二十七日午前六時三分に、『赤い鳥』主宰鈴木三重吉先生が逝去されたという記事があります。森三郎は「狐の提灯」を「茅原順三」の名前で発表しています。初めて『赤い鳥』に載った「赤穴宗右衛門兄弟」の作者名義を五年ぶりに使っているのは、師に対する感謝の気持ちを表したのではないでしょうか。

次回予定　平成29年6月9日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和11年10月号（鈴木三重吉追悼号）の　第二回め